

現代に生きる私たちは不安感を抱いて生きています。それは生きていく中で生じてくるさまざまな出来事が不条理で理解しがたく、辻褄が合わなくて理解しづらくなっているからです。不測の出来事でも合理的に説明できる事柄は了解しやすいものです。そういう事柄は自分の人生に矛盾なく組み込むことができます。今の時代にあつて数えきれないほど、不条理で受け入れがたい出来事が起こります。予期しない災難、突然の不幸、人生途上の死、報われない努力、自分で責任ではない挫折、それらは不条理な思いを伴う出来事です。この不条理の中に身をおくとき、人は「なぜ」と神に問います。この「なぜ」は不条理の中で人が必ず問う問いです。この「なぜ」には、2つの「なぜ」があります。「なぜ、他の人ではなく私なのか」「なぜ、今なのか」。この問いに多くの人は答え合わせることがありません。いうならば、こういう不条理な出来事に直面して、人はどうにもならない他者に直面するのです。不条理なこと自体が他者であり、自分に同化できないことなのです。だから、人生が空しくはかないという嘆きの感情も起こるので

す。

ところが、旧約聖書の預言者は、人間はただ空しくはかない存在だとは見なしませんでした。『草は枯れ、花はしほむが、わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ』（イザヤ書40章8節）と、信仰者は決して孤立してはいるのではなく、神の言葉によって守られ導かれている存在だと主張するのです。そのようなイスラエルの民にあつて、バビロン捕囚の出来事は神に対する信頼を一気に失わせるものでした。「なぜ、神は御自身の民を滅ぼされたのか」という問いを持ちました。しかし、そのような不条理な出来事に背後にも神の摂理があることをイスラエルの民は信仰によって確認していったのです。

さて、使徒言行録13章13節以下でのパウロの説教の大半はイスラエルを導いた神の歴史です。16節にあるように、パウロはユダヤ人と、異邦人でイスラエルの神を信じる「神を畏れる方」に語りかけます。イエス・キリストの救いを語るのに、十字架の贖いをまず語るのではないのです。イスラエルの歴史から語り始めます。まず、出エジプト記から始めて、ダビデによるイスラエル国家の建設、そしてダビデの末から救い主が生まれることを語り、洗礼者ヨハネが先駆者として救い主の到来を告知することを告げます。そして、26節以下で十字架架刑死と復活について語るのです。なぜ、パウロがイスラエルに示された神の救済史を語るのか。それはイスラエルに対する救済史と個人の救済史がぶつかり合うところに一人一人の救いの出来事が起こるからです。

無教会の矢内原忠雄が40歳（1933年）の時に書いた「かなしみ」という6頁ほどの短文があります。10年前に彼は妻を喪っているのですが、その悲しみを経て行き着いた、ある意味晴れやかな気持ちで、悲しみと信仰との関わりについて語っています。

「悲しみのない人生は、晴天続きの都会のように、乾燥し過ぎて埃が立つ。悲しみは人生の潤いです。悲しみに潤されて人は永遠を思います。悲しみは永遠の窓であります。悲しみから見た人生に永遠の薫（かおり）があります。この世にこびり着いて離れ難き人の目を、神に向かい永遠に向かつて開くものは悲しみであります。悲しみのない人は俗人であると言つて憚（はばか）りません。もし人の人たることが永遠を慕（した）い、永遠の生命を得ることにありとすれば、悲しみは人生の祝福であります。イエスさまの言われた通り悲しむ人は幸いであり、その人は天国を見ることが出来ます」。

1 「悲しみは人生の祝福だ」と矢内原は言います。矢内原が「この世にこびりつい

て離れ難き人の目を、神に向かい永遠に向かつて開くものは悲しみであります」と語るように、悲嘆感情が出発点となつて神への通路が開かれることは多くの人が経験的に知っています。また、内村鑑三は娘ルツが19歳で病死してよりのち、より強く信仰の道を究めていくことになつたのは良く知られたことです。それに先立つ21年前、内村は不敬事件の渦中（かちゅう）で妻かずと死別します。内村はインフルエンザで病床につき、押しかける右翼や学生の対応を彼女が一人で行う中で、今度は彼女が病床に伏し、死の直前に横井時雄から洗礼を受けますが、6日後には召されてしまいます。内村31歳のときです。その後内村はかずの墓参りをしますが、それを墓参りとは言わずに「見舞」と表現するのです。そこには死者と語る内村の思いが現れています。冒頭に挙げた「かなしみ」という短文を書いた矢内原忠雄は30歳で留学から帰国してすぐに最初の妻愛子と死別します。その愛子さんが召されて35年経つてから書かれた「春二月」と題する文は次のようなものです。『わが愛する者の召されたのは、我を力強く生かせるためであつた。わが心はこの世にないが、わが足はこの世を歩む。復活の希望はわが心を高くし、復活の希望はわが足を軽くする。復活の希望はイエスの墓に芽ばえ、わが愛する者の墓に花咲き、わが墓に実るであろう』と語っています。

ここで矢内原は愛する者が先だつたことの意味は、自分を力づけるためであつたと断言しています。愛する者の死を経験した者は、長い信仰生活の中で、喪うことの重みをだんだん知つて行くのです。そして、それを死者に返すのではなく、目の前の他者に返していくことを学ぶのです。これが隣人愛なのです。死者と語る中で自らを形成する生者の姿がここにはあります。しかも、その死者は神のもとにあるのです。神のもとにある死者が有限な世界に生きる者に語りかけないわけではないのです。そのように受け止めるキリスト者の姿が、伝道をするパウロの背後にあるのです。

矢内原は別の文章で、「死者はいなくなつたのではなく、キリストの中に生き続けている。死者は地上にいたときにまさる力添えと慰めを、天からあなたに送つて来るのは、このためであると言います。あなた方の心に宿つた悲しみを姑息な手段で紛（まぎ）らわそうとしてはなりません。：悲しみの中から神に呼びわりなさい。：そうすれば、あなた方の深い悲しみも、朝には必ず歓喜に変わるでしょう」と言うのです。深刻な別離や死別による悲嘆をグリーフと言いますが、私たちはこのグリーフを自分が生きている現実世界の枠組みだけで考えがちなのかもしれません。死という決定的な分岐点を超えて、死者イエスが生きている者である私たちを聖霊によって導いているとき、キリストの中で生き続けている死者と語り続けることは生者の務めなのかもしれません。

パウロが伝道をするとき、彼が投獄したキリスト者に対する贖罪の思いがあつたことは確かです。なかには死んだ者もいたことでしょう。そこには自分の力ではどのようにも贖いきれない贖罪の思いがあつたにちがいないのです。その贖罪の思いはイエスを十字架刑死で喪つた弟子たちも同じ思いであつたものです。彼ら弟子たちはイエスが復活したと理解しただけでなく、その後も自分たちを復活したイエスが生かし続けていると確信して殉教の道を行つたのです。それは苦難や悲しみに直面する自分たちに寄り添うイエスの臨在を強く感じていたからです。人間が直面する苦難や悲しみ、不条理な出来事は現実世界では亀裂をもたらしますが、天におられるイエスを信じることによつて、それらの苦難や悲しみ、不条理な出来事は救いに至らせる神の摂理を知らしめる道を教えてくれるのです。